

原疾患治療後、挙児希望目的にて生殖医療を再開する患者の現状

茅切純子¹、竹林七重¹、柴崎有美¹、勝佳奈子¹、門上大祐¹、橋本知子¹、中岡義晴¹
森本義晴²

¹IVF なんばクリニック ²HORAC グランフロント大阪クリニック

【はじめに】

当院では2007年よりがん治療前の妊孕性温存治療を実施している。ここ数年は原疾患治療後に凍結した胚を使用して挙児希望する患者が増え始めている。今回、当院で生殖医療を再開した患者について現状を明らかにする。

【方法】

2007年1月から2018年9月に当院で妊孕性温存目的の卵子凍結、胚凍結を実施した患者において、原疾患治療後に挙児を希望し再来院した女性患者について検討した。

【結果・考察】

妊孕性温存目的で卵子凍結もしくは、胚凍結を実施した患者は110名であった。そのうち原疾患治療後に再来院した患者は19名（平均年齢37.2歳）で、18名が胚凍結した既婚患者であり、その後の生殖医療をスムーズに再開できると考えられる。しかし卵子凍結を実施した患者は全て未婚者であることから、原疾患治療後すぐに生殖医療を再開できないことが推測される。疾患別には乳癌14名、白血病などの血液疾患2名、子宮癌1名、胃癌1名、肛門管癌1名で乳癌が最も多かった。また乳癌患者14名中11名はホルモン療法を中断しての来院であり、数年のうちにホルモン療法の再開が必要であるため生殖医療を行える期間が限られている。対象19名の患者の現況は、凍結胚を用いて妊娠した患者4名、胚移植に向けて準備中の患者3名、凍結胚では妊娠に至らず再度採卵を実施する患者2名、挙児獲得できないまま治療を終結した患者10名であった。妊孕性温存治療時の看護はクリニカルパスを使用しているが治療再開におけるクリニカルパスはまだ確立されていない。今後生殖医療を再開する患者は増加すると考えられるため、妊孕性温存治療から継続した関わりを持たなければならない。よって、患者の持つ様々な背景を考慮した上で、患者のニーズを把握しケアやサポート体制の構築を行っていくことが必要である。